

研究論文

## 看取りケアのエンゼルメイク演習における化粧体験から 学生の学びと授業展開への一考察

福田 洋子

### 1. はじめに

高齢社会を迎え、介護を必要とする高齢者が増える現状<sup>1)</sup>から、高齢者福祉施設で死亡される高齢者が増えてくることが予測される。これまでは、高齢者福祉施設入居の高齢者が終末期になり、医療的ケアが必要な状況になると病院に転院することが多かったが、最近、高齢者の終の棲家となっている高齢者福祉施設において、看取りケアを実施し、死期の処置を行う状況もある。

看取りケアにおいては、医師により高齢者の死亡が確認されると、死期の処置が実施される。病院で亡くなることが多かった高齢者は、看護師により死期の処置がなされている。高齢者福祉施設では、多職種連携・協働において、終末期ケアを実施するが、死期の処置は看護職が主体で、介護職は補助としての役割で実施されていることが、福田(2105)<sup>2)</sup>の調査で明らかにされた。介護職は、生活支援者としての役割があるが、高齢者が病院で亡くなることの多かった状況から、死化粧(以下、エンゼルメイクとする)の仕方や死装束の整え方も習っていないことが多く、経験のある看護職が主として行うことが多い。

介護学生は、心と身体の医学Ⅱの授業での終末期ケアの授業内容の一部であるエンゼルメイクを学ぶ。エンゼルメイクはご遺族のグリーフケアにも繋がり、介護職の役割の一つでもある。終末期ケアの授業で、学生のうちから化粧体験を通し、死生観育成や、グリーフケアの学びを深めることで、エンゼルメイクを実施できるようになるための一歩として重要である。しかし、他者へ化粧を行えるかどうかは、その学生のこれまでの経験や技術力によるものである。本授業では、化粧経験のない学生も、お互いにメイクをし合い、化粧技術の習得とエンゼルメイクへの一歩を学び、そこからの学生の気づきを促すものである。これまでのエンゼルメイク授業は見せる授業形態であったが、学生同士でお互いに化粧を行いその出来具合を評価しあう授業展開での学生の学びや気づきを報告する。

### 2. 用語の説明

**死後の処置**：家族が最期の時間を過ごした後、遺体を清潔にし、生前の外観をできるだけ保ち、死によって起こる変化を目立たないようにするための処置をいう<sup>3)</sup>。

**エンゼルメイク**：医療行為による侵襲(例えば人工呼吸のための挿管チューブや胃管の固定など)や病状などによって失われた生前の面影を、可能な範囲で取り戻すための顔の造作を整える作業や保清を含んだ、ケアの一環としての死化粧である。また、グリーフケ

アの意味合いも併せ持つ行為であり、最期の顔を大切なものと考えたうえで、その人らしい容貌・装いに整えるケア全般のことである（エンゼルメイク研究会の定義）<sup>4)</sup>。

グリーフケア：愛しい人と死別した家族（遺族）がその悲嘆（グリーフ）を乗り越え、悲嘆から立ち直り、再び日常生活に適応していくことを見守ってゆく（ケアする）ことである。大切な人の死前後を問わず結果として遺族の何らかの助けになる行いのことを意味する<sup>5)</sup>。

### 3. 研究目的

本研究の目的は、介護福祉士養成教育における、終末期ケアの授業でのエンゼルメイクの実施方法が教科書に詳しく記載されていないことから、授業のあり方は各学校の裁量に任されている。介護学生は卒業後、高齢者施設に就職することから、高齢者の死に関わることになる。そこで、死期の処置における死化粧（エンゼルメイク）体験からの学生の気付きを促し、エンゼルメイク実施時の課題を明らかにすることで、今後の授業展開方法の一助とする。

### 4. 研究方法

調査時期：2016年7月7日 心と身体Ⅱの授業でエンゼルメイク実施と授業後に質問紙調査とインタビュー調査を実施した。

調査対象：介護学生2年生16名（女10名、男6名）

研究方法：質問紙調査を実施し、結果は単純集計した。また、アンケートに協力を得た中から6名にインタビュー調査を実施し、結果はカテゴリー化を行った。

倫理的配慮：研究概要を説明し、回答は無記名で任意であり、調査結果は個人が特定されないことを説明し、インタビューは、許可を得て録音した。データは本研究以外に使用しないことを口答にて説明し、承諾を得た。

### 5. 調査結果

(1) 化粧（エンゼルメイク）体験の学びに関するアンケートとインタビューの内容と結果  
その結果を表1から表5に示す。

#### (2) 結果の概要

調査対象者が、19歳から20歳であり、そのうち男子学生が6名である。男子学生が多いことから化粧体験がない学生が50%と半数もいたことから、化粧に興味がある学生が37%、興味がない学生63%と興味のない学生が多くいた。しかし、化粧体験は、87%の学生が学びに繋がったと答えていた。化粧を経験したことのない学生も化粧の仕方がわかったと答えており、化粧の手順や必要物品等がおおむね理解できたようである。

学生は化粧体験を通し、自分自身が綺麗に化粧できる技術があることが、他者を綺麗に

表 1. 問 1 から問 5 の質問内容と結果

問1	性別	女	男
		10名 (62%)	6名 (38%)
問2	年齢	19歳代	20歳代
		13名 (81%)	3名 (19%)
問3	化粧をしたことがあるか	ある	ない
		8名 (50%)	8名 (50%)
問4	化粧に興味があるか	はい	いいえ
		6名 (37%)	10名 (63%)
問5	化粧体験は学びに繋がったか	14名 (87%)	2名 (13%)

表 2. 問 6 の質問内容と結果

問6 化粧体験はどのような学びに繋がったか (自由記載)	
カテゴリー	サブカテゴリー
化粧を考えるきっかけになった	・生前にどのような化粧をされていたのか考えるきっかけになった
	・その人に会った化粧をすることを考える
	・好きな色などを考える
化粧の仕方	・化粧の勉強になった
	・他人に化粧をすること
	・人にしてもらったことがないので新鮮な感じがあった
	・人に化粧ができるかもしれない
	・道具の使い方
	・別人になった

表 3. 問 7 の質問内容と結果

問7 化粧体験で難しかったところは何ですか	
カテゴリー	サブカテゴリー
他人に化粧をする	・他人に化粧をどうすればよいかわからなかった
	・他人に化粧するのは初めてなので難しかった
	・他人に化粧するのは初めてで緊張した
	・綺麗に塗ることができない
動くところを塗る	・アイライン、アイシャドーを塗るのが難しかった
	・相手が動くので口紅が難しかった
色使い	・どんな色を塗るのか難しかった

表 4. 問 8 から問 10 の質問内容と結果

問8	死化粧を深く学びたいか	はい	いいえ	どちらでもない
		8名 (50%)	6名 (37%)	2名 (13%)
問9	家族がなくなった時に化粧をしてあげたいか	10名 (63%)	5名 (31%)	1名 (6%)
問10	死化粧で学びたいことはどのような事ですか			
死人が生前どんな人に見えたか どんな色がいいか 色々学びたい 化粧の仕方				

表 4. インタビュー調査結果

エンゼルメイク(化粧)体験で学んだことは何か	
カテゴリー	サブカテゴリー
化粧で綺麗になる	化粧で変化する顔に驚いた 女性は何つになっても綺麗でいたいものと学べた 寝たきりの人でも化粧をして綺麗にしたであろうことを学べた 綺麗になれることがあれば綺麗になった方がよい 亡くなった人の顔を綺麗にしてあげて見送りやすいようにしてあげたい
仕方がわからない	男なので化粧経験がなく、どれが正しいのかわからない

エンゼルメイクを仕事として行っていきたい理由	
カテゴリー	サブカテゴリー
責任を持つ	最期まで責任を持って関わっていききたい 仕事としては重要だと思うので責任を持ってやっていきたい
最期のケア	最期のケアとして亡くなった人の顔を綺麗にしてあげたい 家族に喜んで頂けるように綺麗にしてあげたい

エンゼルメイクを家族と一緒にを行うことをどう思いますか	
カテゴリー	サブカテゴリー
責任を持つ	最期まで責任を持って関わっていききたい 仕事としては重要だと思うので責任を持ってやっていきたい
最期のケア	最期のケアとして亡くなった人の顔を綺麗にしてあげたい 家族に喜んで頂けるように綺麗にしてあげたい

グリーンケアとしてのエンゼルメイクを介護福祉士の役割とするにはどうすればよいか	
カテゴリー	サブカテゴリー
エンゼルメイクの仕方を学ぶ	施設で研修として練習していききたい わからないことは遠慮せずわかるように聞く その人の一番輝いていたころのように化粧をしたり、綺麗ねと言われるようにしたい 自分で考えて対応していけるようにしていきたい
家族の知らない生前の様子を伝える	生前の頑張っていた様子を伝えて、一緒に頑張っていきましょうと励ます

化粧してあげられることに繋がることに気づいた。さらに、エンゼルメイクは、生前のその人が輝いていた時の顔を再現しなければ、死亡した本人も、家族も喜んで頂けないことにも気づき、化粧方法を学ぶ必要性を感じたようである。また、エンゼルメイクを家族と一緒にすることで、生前の様子や本人の好みの色などを伺える機会となり、家族の心の安寧を共有するグリーンケアに繋がっていくことに気づく結果となった。

「家族がなくなった時に化粧をしてあげたいか」では、してあげたいが63%で、化粧に興味がない学生も、家族との最後の別れには、綺麗な顔でお別れしたい気持ちの表れが出ていた。男性6名中3名(50%)は家族にしてあげたいと答えていた。

エンゼルメイク体験授業を受け、他人に施す化粧がいかに難しいかにも気づき、自身の化粧技術の向上が必要であることに気づいた。アイシャドーやチークもその人の好みや似合う色があり、綺麗に見えるように化粧しないと笑いの原因になることにも気づいた。事実、実施中も上手に化粧することができなくて、皆で笑い合っている場面が何度かあった。化粧経験者である学生が、化粧をしたことのない学生にアイシャドーの塗り方やチークの入れ方を指導している場面もあり、「アイライン、アイシャドーを塗るのが難しかった」と緊張感を訴えていた。また、「人にしてもらったことがないので新鮮な感じがあった」と初めて他人から化粧をしてもらったことへの気づきも出されていた。化粧体験授業から化粧を綺麗にできる技術を身に付け、高齢者への化粧療法にもつなげていければと考え、化粧体験授業後から化粧をしだす学生も現れた。

学生は、エンゼルメイクの手技を通して、看取りケアへの関心を高め、死生観を養い、家族のグリーフケアに繋げていく方向を考えられたのではないか。卒業後は、高齢社会で死を見つめる仕事に着く学生が、授業を通し人生の最期まで責任を持って、心を尽くして御遺体に関わることを学ぶ経験となったことを、調査の結果から伺える。

## 6. 考 察

心と身体の医学Ⅱの授業での、終末期ケアにおける化粧体験授業は、学生がお互いに化粧をし合い、そこからの学びや気付きから看取りケアにおけるエンゼルメイク実施の第一歩となると考える。

化粧をしたことのない学生にとり、化粧を他人にほどこすことは大変難しく、綺麗に化粧ができないことに対して、どうすればよいかわからない状況があったことは、エンゼルメイクに対する自分自身の課題に気づく機会となったと考える。化粧で変化する自分自身の顔を鏡で見ることで、これまで実習で関わった高齢者の顔を思い出し、化粧で綺麗に整えることで、元気であった頃の豊かな表情がよみがえることを認識するきっかけとなった。その経験を通し、最後までその人への真摯な気持ちと尊厳をもって関わることの重要性を感じることができたと考える。

超高齢社会では、これまで看護職の役割であったエンゼルメイクが、今後は介護職が指導でき、実施できるようにしていく必要が出てくる状況がある。それには、看護職の学びと同じように、介護職も学生時代から看取りケアにおけるエンゼルメイクの方法を学び、家族に満足していただけるケアの提供ができる技術力をつけていくことが重要であると考えられる。さらにエンゼルメイクを通し、家族のグリーフケアに繋がるケアに高めていく必要があるだろう。エンゼルメイクは、介護職が最後まで責任を持って行うケアであると学生が答え

ているが、介護職が自信を持って役割を遂行するためには、介護職の終末期ケアの教育内容の充実を図ることが必要かと考える。化粧は女性がするものと考えている男子学生も多く、化粧体験後のアンケートやインタビューでも、男なので「あまりよく分からない」との答えがあった。しかし、エンゼルメイクは、男女差や興味があるか、ないか等に関係なく、終末期ケアとして実施できるように技術力をつけておくことが看取りの質の向上へ繋がられるのではないかと考える。ゆえに、生活支援技術としてのエンゼルメイク技術を学習できる環境作りが必要であると考えます。

## 7. 今後の課題

学生同士でお互いに化粧をし合う授業展開は、学生が他人に初めて化粧をすることを通してエンゼルメイクの体験を演習した。次回からは、エンゼルメイクだけに着目せず、死期の処置としてスキンケア方法も講義し、スキンケア技術と共にエンゼルメイクを実施できる授業を展開し、死者への尊厳と看取りケアの質の向上を目指したい。

## 8. おわりに

超高齢社会を迎え、介護職の役割は増え続ける現状がある。化粧体験を通し将来は、自分も高齢者へエンゼルメイクをする日が来ることを実感した学生が多かった。化粧に興味がない学生もいるが、男子学生もその時には、死者にエンゼルメイクを施さなければならぬ状況が来るのである。今回のエンゼルメイク体験授業は、生活を共にした施設の高齢者とその家族へ、敬意をあらわす手段でもあることを学んだようである。エンゼルメイク技術がその人の人生の締めくくりに関われることに誇りを持つ手段の一つとして重要な技術であること、さらに人間への尊厳の心を養って行ける技術であることを、本授業の課題から今後の授業展開を深めていく必要がある。

## 引用・参考文献

- 1) 内閣府「平成 26 年度高齢化の状況及び社会対策の実施状況」2015
- 2) 福田洋子「特別養護老人ホームでの看取りケアに関する研究－多職種連携・協働の現状と課題－」2015 日本福祉大学大学院社会福祉学研究 修士論文
- 3) 井上智奈美「図書館員のツボ 27 エンゼルメイク」病院図書館 2013 33 (2) : 121-123
- 4) 小林光江「ケアとしての死化粧 エンゼルメイク研究会からの提案」日本看護協会出版会 2004
- 5) 江角弘道「グリーンケアについて」仁照寺平成 22 年度兵庫教区住職研修会資 2010
- 6) 加藤孝央、石原俊一、大木桃代「女子大生における化粧認知及び行動と心理的健康の関連性」大原社会問題研究所雑誌 2012 No.645
- 7) 文元麻理香、田嶋順子他「美容の役割とライフデザイン エンゼルメイクの調査」山

野美容芸術短期大学美容福祉ライフデザイン研究チーム実践報告③ 2015 p22-23

- 8) 藤原和子「これでわかった看取りのケア Q&A」月刊ナーシング 2007 Vol.27 No.3
- 9) 川上嘉明、新谷富士雄「特別養護老人ホームにおける要介護高齢者の看取り介護」総合看護 2007 4月号
- 10) 小林珠美日本人の死生観・遺体観に基づくグリーフケアとしてのエンゼルメイクに関する考察」医療・生命と倫理・社会 2012 11:94-101

